

巨木倒る

——大橋吉之輔教授を憶う——

尾 崎 安

突然の訃報に接したのは、平成五年十一月三日の朝であったと思う。休職願いを提出されて、一意病氣恢復に専念されると伺ったばかりの頃で、呆然自失する外はなかった。今はただ、天翔ける御霊の安らかならんことを祈念するのみである。

この国におけるアメリカ文学研究の分野では、その研究書、翻訳、エッセー等で常に第一線に立たれ、後輩の研究者に対しても良き指導者であった。

本学創立に際し、乞われて慶応義塾大学より本学に移り、健康を気づかわれながらも、教室における学生との接触を楽しんでおられた。特に想起されるのは第一回卒業生の卒業論文指導のことである。十七名という学生が教授の下に集まったとき、教授会ではその数のあまりの多さに驚き、十名くらいに減じるべきだということとその旨を（当時入院中の）教授に伝達したところ、「私は好きだからやりますよ」という返事が返ってきた。その後、略そのとおりに指導が行われたように記憶する。面目躍如というべきであろう。

もはやその馨咳（けいがい）に接すること能わず、と思うと、万斛（ばんこく）の涙を禁じ得ない。

おわりに、トマス・グレイの「田舎の教会墓地にて詠める挽歌」（Elegy Written in a Country Churchyard）の最終部にある「墓銘」（Epitaph）の一節を引用して、先生の霊前に献げたい。

No farther seek his merits to disclose,
Or draw his frailties from their dread abode,

(There they alike in trembling hope repose,)

The bosom of his Father and his God.

いさおしをなおさら尚更に引き出すことなかれ。

欠けしをあはばなあは発きそ。畏れあるところにて相ともに打ちふる震え、望のぞみもち安やすらえり。

父にしてみ神なるふところの中にこそ。

(福原麟太郎訳)